

日本歯科医史学会

第20回（平成4年度）学術大会講演抄録

1) 中国医学と道教

—XII. 韓国医書について—

Chinese medicine and Taoism

—XII. View from Korean Medical Books—

吉元 昭治

Shoji Yoshimoto

1. 緒言と目的

中国と日本との間にあって、彼我交流の中継地としても、朝鮮半島の位置の重要性は今更、言うまでもない。半島は医学の方面では、古くから中国医学の影響を受け、我が国に及ぼしたそれもまた、はかり知れないものがある。しかし、中国医学をとり入れたといっても、半島特有の土壤、民俗性などから独自の発展、成果をあげ、のちに東医学という医学を確立していった。この方面の研究では、我が国では、三木栄氏を第一とする、その広汎、確固たる研究は、半島医学の全体にわたり詳細を極めている。さらに氏は、半島医学に対する道教の影響—道教医学にも着目され、ふれる処がある、今回は、これらの点について若干の考察を加えたい。

2. 本 論

半島医学書の中から、主な次の3種をえらび、さらに演者が、ソウル市で採取した、民間療法書について検討を加えた。

(1) 医方類聚（李朝、世祖、金礼蒙他、1445～1477年）

この頃すでに、半島独自の本草書『郷薬集成方』があったが、医方類聚は全巻365巻、唐、元、明初の医書類153種から編集された。ここで

注目されるのは、「巻5、五蔵開」の「五臓六腑図」で、これは『正統道蔵』中の『黄帝五臓六腑補瀉図』、『上清黄庭五蔵六府真人玉軸経』また『雲笈七籤、巻14』の『黄庭遁甲緑身経』さらに『遵生八箋』（明、高濂編）のなかの『四時調攝箋』と同じといえよう。さらに『医方類聚』の各項の終りには、『巢氏病源』などからひいた導引法がある。その199巻から205巻までを「養生門1～7」にさいている。内丹、外丹、服餌、却穀、摂生など、道教医学そのものがある。

(2) 東医宝鑑（宜祖、許浚著、1613年）

本書は、半島医学を代表する巨著であり、中国と半島固有の医書（86種の名をあげている）を合せて、内景篇、外景篇、雑病篇、湯液篇、鍼灸篇等からなっている。このうち、内景篇の初めの「集例」では、精気神にふれ、道教經典の『黄庭経』の内景を参考にしたといい、「道家以清静修養為本、医門以藥餌針灸為治」ともかいている。ここで重要なのは、李東垣を北医、朱丹溪を南医とし、自分の国は「僻在東方」だから、国の医学を東医とするといっていることである。三木氏は、この内景篇をもって道教がそのバックボーンになっているといわれている。その他、外景篇の臍では、灸臍得延年が、雑病篇婦人では、安産方位図、蔵胎衣吉方、催生符、借地法が、鍼灸篇では諸経導引など、道教医学の色彩が強い部分がある（処方数 約 4,000）。

(3) 方薬合編（高宗、黄泌秀選、1885年）

『東医鑑宝』をもととし、それにつづく『医宗損益』、『医方活套』などから、抽出、簡便化したハンドブック的なものであるが、韓国では現在でも多種のものが出版されている。本書の特色は、上段に「薬性歌」が、下段を3つに分け、それぞ

れ上統（補方，123方），中統（和方，181方），下統（攻方，163方）の計467方があるが，人蔘の配合処方数はそれぞれ，70，54，8の132方（28.3%）となっている．本書についても，やはり道教医学の痕跡をみることが可能である．すなわち，初めに，「保生大道」，「須識扶陽説」があり，さらに，精気神の代表症状とそれに対する薬方がある．また，薬性歌や処分のなかにも，その説明に，呪術的，方術的なものがあったり，薬名にも道教的な臭いがあるものもある．また「造軽粉法」など，水銀製剤の製造法もある．

（4）奇経八脉单（著者および出版年不明，手書）

本書は10.2×17.5 cmの大きさで，李王朝末期に流行した袖珍民間療法書の一つとおもわれる．前半40頁は，奇経八脉を中心とした鍼灸療法が，後半11頁は，救急，符呪などがしるされている．「急々如律令」とか，各種の符をみることができる．この小さい書から，民間療法，道教医学，および実際の医学が一つの場を共有していたことが，つい100年前位にもあったことを知ることができる．

3. 結 論

韓国の代表的医書3種と，民間療法袖珍書のなかから道教医学の背景について考えた．道教，ひいては道教医学が，強く，長く影響したことがわかる．これらの点につき，さらに研究をすすめるつもりである．

2) 小野蘭山・蕙畝の日記にみる医学館の本草講書と薬品会

Botanical education and 'Yakuhiin kai' (exhibitions of medical products) at medical school of the Tokugawa shogunate so as seen from the diaries of Ranzan Ono and his successor Keiho Ono

岐阜県立大垣工業高校定時制 遠藤 正治

Shoji Endo

今回は，小野蘭山とその後継者小野蕙畝の日記によって，医学館におけるかくれた業績として薬

園の経営があることを紹介した．今回は，同じく『蘭山先生日記』と『蕙畝日記』から，医学館における本草講書と薬品会に関するいくつかの事績を跡づけることができたのでこれを紹介することにする．

1. 蘭山と本草講書

蘭山は，京都から出府した4日後の寛政11年4月2日，若年寄 堀田正敦から医学館での講書を命ぜられた．以来，死の前年の文化6年至るまでの11年間，六次にわたる諸国採薬の期間と医学館が焼失した文化3年を除いて，本草講書に携わり，毎年12月，その褒賞として銀7枚を受けている．『蘭山先生日記』の本草講書に関連した事項を見ると次のようである．

寛政11年4月2日 多紀氏及千田玄知両所被出於館講書可仕旨津守殿仰之由被申達，

寛政12年12月25日 医学館講書に付，白銀7枚拝受，

享和元年11月9日 一昨年より之綱目今日満会，

享和3年3月12日 例刻向大手前今日造釀類終，

享和3年3月13日 御堂の会今日湿艸下畢，

享和3年3月14日 啓蒙献上之願 今日相済，

文化3年3月4日 （医学館焼失）

文化4年5月28日 午半刻より向于大手前今日本艸綱目会読1周終，

文化4年6月15日 医学館開会也，拙者は18日より発会也，

文化6年3月28日 例刻会読，本艸2周今日満会，依之五会休息従来月13日可始爾雅会，

医学館における講書または会読は，躋寿館の百日授業以来，儒学の六経に習って，本草，靈樞，素問，難経，傷寒論，金匱要略の6部を中心に行われていた．幕府移管直後，田村西湖によって行われた『本草綱目』の講書は，38の日の日割が当てられていた．

蘭山の場合も，ほぼこれを踏襲して38の日，月6回の割合で講書をしていたようである．講書の